

むかし、レストの町の近くのヴェロイ島に、イサクという貧しい漁師が住んでいました。イサクの持っているものといえば、小さな船一艘と二、三頭のヤギだけでした。小屋には、おかみさんと、お腹をすかせたたくさんの子どもたちがいました。けれどもイサクは、神さまのくださる物でいつも満足していました。

ただひとつだけ、イサクには悩みがありました。それは、イサクの小屋のとなりに金持ちが住んでいて、いつもイサクにいやがらせをすることでした。金持ちは、イサクを追いはらって、イサクの小屋の前の船着き場を自分のものにしたいと願っていたのです。

ある日、イサクは沖へ漁に出ました。すると、急に濃い霧が渦巻き、ひどい嵐になりました。イサクは、とった魚をみんな海に投げすてて船を軽くしましたが、船は、いまにも海の底に引き込まれそうでした。何時間も何時間も海を流されていきましたが、どこまで行っても陸地は見えません。霧と嵐はますますひどくなっていきます。そのうち、妖精ドラウグたちの吊いの歌が聞こえ、イサクはもう助からないと観念しました。そこで、神さまに、

「わたしがいなくなっても、どうか妻と子どもたちをお守りください」と祈りました。そのとき、流木に鶉（う）が三羽止まっているのが見えました。流木はたちまち流されていき、イサクは疲れはてて気を失ってしまいました。

やがて、だしぬけに船の底がドスンと陸にぶつかりました。イサクがおどろいて起きあがると、霧のあいだから太陽が顔を出して、牧草地や丘をてらしていました。目の前には麦畑が広がり、道の向こうには緑の小屋があって、小屋の屋根の上で金の角（つの）のヤギが草を食べていました。イサクは、

「助かった。ここが、話に聞いていたウトレストだな」と思って、小屋のほうへ登っていきました。小屋の前で、青い服を着た小さなおじいさんがパイプをふかしていました。

「イサク、よく来たな」と、おじいさんはいいました。

「こんにちは、おじいさん。あんたは、わしを知っているのかい」

「たぶんな。だから、今夜は、あんたを泊めてやろうと思ってな」

「それはありがたい」

おじいさんは、

「ただ、うちの息子たちが文句をいわなければいいんだが。あんた、息子たちに会わなかったかい」とききました。イサクは、

「いいや。流木にとまって騒いでいた三羽の鶉を見かけただけだ」と答えました。

「ああ、それがうちの息子たちだよ。だがあんたはお腹がすいているようだ。こっちへおいで」

おじいさんはそういうと、イサクを家の中に入れました。部屋はたいそうりっぱで、テーブルにはあらゆるごちそうがならんでいました。かに、たら、トナカイの肉、魚のレバー、

チーズにパン、お酒もたっぷりありました。イサクは夢中で食べたり飲んだりしましたが、ごちそうは、食べても食べてもなくなりませんでした。

しばらくすると、外で騒がしい音がしました。おじいさんは出ていき、まもなく三人の息子を連れて入ってきました。息子たちは行儀よくいっしょに食べたり飲んだりしました。そのうちにイサクとすっかりなかよしになりました。

息子たちはイサクをさそって漁に出ました。息子たちが釣ると、魚は船が沈みそうになるほどたくさん釣れました。ところが、イサクが釣ると、魚は針からするするぬけ落ちてしまいました。家にもどっておじいさんに話すと、

「なに、この次はうまくいくさ」といって、釣り針を二、三本くれました。

つぎに漁に出たときは、イサクもたくさん魚を釣りました。家にもどると息子たちが、魚を干すのを手伝ってくれました。

やがて、イサクは、おかみさんや子どもたちのことが恋しくなりました。家に帰りたいたいというと、おじいさんは、

「おまえに、新しい大きな船をつくってやろう。船が出来上がったころにもう一度ここにもどっておいで。そうしたら、いっしょにベルゲンへ魚を売りにいこう」といいました。イサクは喜んでお礼をいって、どうやったらこの島にもどってこられるのかとたずねました。

「海へ出たら、鵜のあとをまっすぐついてくるのさ。じゃあ、元気だな」

イサクは自分の小さな船で島をあとにしました。しばらくしてふり返ってみると、島はどこにも見えず、海が青々とどこまでもうねっているだけでした。

船ができるころ、イサクは海へ出て、もういちどウトレストの島をたずねることができました。おじいさんが作ってくれた船はすばらしい船でした。ふたりはその船にこのあいだの干した魚を積んでベルゲンの町に売りにいきました。おどろいたことに、魚は、かごから出しても出してもなくなりません。イサクはそれを売ってたくさんのお金をもうけて、わが家に帰りました。

それからというもの、イサクは、何をやってもうまくいきました。イサクはそれがだれのおかげなのかちゃんと知っていました。そこで、秋になって船を浜にあげても、冬のないだ船の番をしてくれる妖精たちのために、いつも、船の中にいいものを置いておきました。船には、姿こそ見えませんが、たしかにだれかが乗っているらしく、クリスマス晩にはいつも明かりがともし、にぎやかにバイオリンがひびき、歌いさわぐ声が聞こえるのでした。